

認知症になっても安心して暮らせる社会を

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

ぼ～れ ぼ～れ

ゆっくり やさしく おだやかに



群馬県支部版

わたぼうし No.459

認知症の人と家族の会

理念

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

巻頭言

追悼 長谷川和夫先生



認知症の専門医である長谷川和夫先生が11月13日逝去されました。享年92歳でした。先生の立派な功績とは無縁な個人的な思い出を語らせていただきます。

長谷川先生とのご縁は、「家族の会」に関わり始めて間もなく、先生がおられた聖マリアンナ医科大学のデイケアを見学に伺った時に始まりました。

また、宮崎県で全国研究集会が開かれ、シンポジウムで進行役を務めさせていただいた際、シンポジストであった先生から親しくお声をかけていただいたことも懐かしく思い出されます。

「家族の会」のイベントで、故早川一光先生と高見国生前代表が抱腹絶倒のトークを繰り広げた後、「ありやあまるで吉本だね」と感想を述べられた時、先生の別の一面をのぞかせていただいた思い出でした。

会員の岸久美子さんのお手紙のやり取りを仲介させていただいたこともありました。

先生、安らかにお眠りください。

目次

・ 巻頭言 追悼 長谷川和夫先生	1 頁
・ おたよりから	2 頁
・ 報告 中之条町介護家族支援講座	2 頁
・ 報告 支部代表者会議	2 頁
第37回全国研究集会 in 山口	2 ～ 3 頁
・ 報告 認知症で日本をつなぐ	2 ～ 3 頁
シンポジウム 2021	3 ～ 4 頁
・ へわが家の認知症ケア手帳⑳	3 ～ 4 頁
渡辺医院院長 (当会顧問) 渡辺俊之	4 頁
編集後記	4 頁

これからの予定

- 12月12日(日) 洪川つどい 10時～12時 洪川市中央公民館
- 12月18日(土) 太田つどい 10時～12時 荳川行政センター
- 12月19日(日) 県央つどい 10時～12時 県社会福祉総合センター
地下B01会議室
- 12月11日(土) 10時～16時 富岡市議会議会議棟13会議室

電話相談

群馬県支部 (群馬県からの委託事業) 認知症の人と家族のための電話相談

本部フリーダイヤル 027 (289) 2740
0120 (294) 456



おたよりから

後ろめたさがそうさせる？

先日はありがとうございました。

あの電話の後、義母の入所前のケアマネさんに話を聞いていただく機会を持ちました。

それですべて解決したわけではありませんが、施設でのスタッフのかかわりとデイでのそれには違いがあることと改めて考えさせられました。

義母が入所して2か月、私と主人の負担は気持ちの上でも体力的にも減りましたが、介護を人にお任せして楽になったというのが少し後ろめたい気もしています。だから、介護士の方をもっと知って、義母の状態を細かく把握するのがつとめと思ってしまうのでしょうか。??です。

とにかく、施設の状況をみながら少しずつ話せる関係を作っていきたいと思っっているこの頃です。



大切なことを再確認できました

「繁田先生の言葉から」を読ん

「認知症になった本人の悔しさ、忘れたり失敗した時の本人の惨めさ、誰にも相談できない寂しさ、人の役に立てなくなった情けなさに共感すること」これが家族にできること。

これを読んで大切なことを再確認する事が出来ました。

出会いを楽しみに

主人と同程度の方との出合いがあれば・・・気持ちを共有して、お互い励まし合えればと会への参加を楽しみにしていました。介護度により悩みも異なり、皆様の様子をお聞きしてうなずくばかりでした。

主人が肺炎で入院になりました。しばらく会をお休みさせていただきました。

行く行くサギ?

今回こそはつどいに出席してみようと思っけていても、父の状態が落ち着いているとついつい自分のことに時間を割いてしまいます。行く行くサギですね(笑)みなさんにお伺いしてみたこともあるので、当日の様子で参加させて頂ければありがたいです。

中之条町で家族支援講座を開催

11月13日、中之条町で今年度最初の支援講座を開催しました。諸事情により10月の沼田市での講座が中止になりましたので、ずいぶん久しぶりの印象でした。北毛地区の世話人の熱心な広報により5家族、6名の家族が参加されました。

親御さんからの一日に数百回の電話攻撃に悩まされた、お金を盗つたと一番いやなことを配偶者から

言われつらかった、私の言葉遣いが認知症にさせたのだろうか、などの話が次々に語られました。

同じ立場の人どうして話し合い、また、渡辺俊之先生の適切なご助言もいただき、少し気持ちを楽にしていただけではないかと思いません。

次回は12月11日、富岡市での開催です。



開催・参加報告

10月30日、31日

- 2021年度「家族の会」支部代表者会議
 - 認知症の人と家族への援助をすすめる
- 第37回全国研究集会 in 山口



〈支部代表者会議を進行する本部事務局〉

今年度は山口県支部の担当で、なんとか現地集合で開催したいと準備してくれました。しかし、残念ながら、現地集合は山口県内の人のみ、県外の人はオンラインとの結論に至りました。群馬県支部からは、支部代表者として恩田初男副代表が、代表の田部井が理事として参加しました。



支部代表者会議

支部代表者会議では、事務局が事前に参加者に意見を募り、予め回答した上で当日を迎える丁寧な準備をしてくれました。その分、納得のいく意見交換ができたと思います。

主なテーマの一つは、「家族支援」でした。そのイメージは人さまざまで、一定の方向性を出すにはきめ細かい詰めが必要だと感じています。

また、国の新事業「本人と家族を一体的に支援するプログラム」も話題に

なりました。本人と家族を一体として支援するという趣旨に異論はありません。しかし、市町村ごとに「ミーティングセンター」を設置するなどの方法論については、まだイメージが十分湧きません。市町村の動きなど注意深く見守りたいと思いました。

第37回 全国研究集会

●基調講演「新時代に希望を抱いて認知症とともに今を生きる」（講師兼行浩史山口県こころの医療センター院長）では、同センターと先生の認知症に対する丁寧な取り組みが印象に残りました。

●体験・実践発表では、MCIとしての失敗談を笑顔で語る栃木県の福本知恵子さんの明るさに癒されました。

●シンポジウム「新時代について、みんな考えてよう」では、山口県支部代表でコーディネーターを務めた川井元晴先生の、予め取っておいたアンケートをもとに進行するというアイデアが光り、とてもいいと思いました。「新薬を使ってみたいか？」の問いに、牧師である認知症の岡部俊昭さんが、もつとも積極的に「使ってみよう」と答えていたことが胸にしみました。

報告

世話人 桑畑 裕子

【認知症で日本をつなぐシンポジウム 2021】
 ↳ 認知症最新医療とコロナ下での本人・家族の思い ↳ に参加して

11月7日(日)、認知症関係当事者・

の会をきっかけに、認知症になって

支援者連絡会主催の【認知症で日本

も安心して暮らせる社会をめざして

をつなぐシンポジウム 2021】に、参

加しました。特別講演とシンポジウ

ムの2部構成で、YouTube配信

2019年、初の【認知症で日本をつなぐ

され、私は家族とともに自宅で視聴

が二回目。“つなぎ・つながり・つな

しました。

ぐ”近年の新しい認知症動向を主眼

主催の認知症関係当事者・支援者

に置いたシンポジウムで、当日は380

連絡会は、2017年、京都で開催された

件の参加がありました。

第32回国際アルツハイマー病協会・

国際会議(事務局)認知症の人と家族

1. 特別講演：認知症医療最前線

「アデユカヌマブ」と「ドネペジル」はどう違うか？

↳ 新薬登場の光と影 ↳

講師 新井平伊 先生 (順天堂大学医学部名誉教授)

・アルツクリニック東京・院長

認知症の専門医の立場から新薬に

申請中で、アリセプトよりも副作用

について詳細に解説がありました。

が少なく、発症初期段階から使用開

新薬の登場は約20年ぶり。話題の

始。早期発見↓早期診断↓早期絶

「アデユカヌマブ」は、日本でも承認

望・・・とならぬよう、その効果に期

待が寄せられています。

会報『ぼ〜れ ぼ〜れ』(2021年4〜

6月号)の新井先生の連載記事「認知症の今」も、ぜひ、ご確認ください。



〈新井先生〉

渡辺俊之の「わが家の認知症ケア手帳」⑩
引きこもり 勇気をだし相談を

渡辺医院院長（精神科医、当会顧問） 渡辺俊之



八十代の A さんは階段で転んで骨折し、救急車で搬送されてきました。私が診察すると、認知症を発病していることが分かりました。家には五十代の無職の息子がおり、親戚や近隣住民との付き合いもなく二人だけで暮らしてききました。息子には発達障害と精神疾患があり、家の中はごみ屋敷のようになっていたようです。

「8050問題」「7040問題」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。ひきこもりの子どもとその親が年を取り、八十代や七十代の高齢の親が五十代、四十代の子どもを支えていることで生じる問題をいいます。ひきこもりになる原因は発達障害や精神疾患、知的障害、性格特性などさまざまです。早くから支援を受ければひきこもりの長期化は避けられませんが、精神科や心療内科に行くことに抵抗を感じる親もいますし、経済力があれば子どもは自立せずとも暮らせます。でも、年老いた親は身体的、精神的に弱っていき、もちろん認知症に

なることだってあるわけです。

親戚や近隣住人との関係が希薄な場合は、問題は特に深刻です。親が認知症になって生活能力が低下して、親子ともに健康状態が悪化したり、家のごみ屋敷のようになり、悲観した子どもが親と無理心中図ったりすることが、大きな社会問題となつています。

A さんの場合、入院がきっかけに社会との関わりができ、息子にも支援が入りました。もし、ご自身がひきこもり、あるいはその親であれば、勇気を出して相談窓口ご連絡してください。親戚に心当たりのある親子がいれば、放置せずに関わりを持ってください。近所に心配な家庭があれば、民生委員や児童委員に伝えてください。

「そのうち」ではなく「今日」対応してください。周囲が早くから気づき、介入することが悲劇を防ぎます。

2. シンポジウム：「コロナ下で 認知症とともに生きる」
「認知症の人、その家族、支援者でのディスカッション」

〈認知症関係5団体〉

- 全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会
- 男性介護者と支援者の全国ネットワーク
- レビー小体型認知症サポートネットワーク
- 認知症本人ワーキンググループ
- 認知症の人と家族会

それぞれの代表者から各団体の活動内容、実践報告がありました。

新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に外出自粛や「つどい」の場、その多くが制限され、活動自体も縮小せざる負えない中、遠方に移動することなく、自宅で気軽にリモートアクセスできる良さ等、ポジティブに工夫をして交流できる良さを、このご時世だから実感できた、皆さんの前向きな姿勢が印象的でした。



特に、「ご本人のエピソードから、

「コロナ下で家の中にこもりがち」、「外出時のワクワク感が失われた」、「疲れるけれど、外出した時の喜び、楽しさ」・・・心地良い刺激が、どんな状況においても必要不可欠であることがとてもよく伝わりました。コロナ下であっても、今後いかにあるべきか：私ならどうするか：どのようサポートを：等を考えることができました。『コロナ禍』：不幸な出来事を意味する、災い禍。ではなく、『コロナ下』：ウィズコロナ、アフターコロナとして新しい生活様式を受け入れ前向きに、ポジティブに捉えるーシンポジウムのテーマどおり “認知症で日本をつなぐ思い” が込められたシンポジウムだと充分に感じることができました。

〈編集後記〉



秋がだんだん深まってきました。ちょうどこの会報を編集しているなか、長谷川和夫先生が亡くなられたとの知らせが届きました。深い考えなしに思い出すまま先生との触れ合った（と勝手に思っている）あれこれを書かせていただきました。（田部井）